知覚系-行動系の統一的理解への基礎的研究

——その背景的構想——

内　山　道　明

目　次

はじめに
1. 科学の統一の問題をめぐって
2. 心理学の課題について
3. 統一と対応の問題
4. 人と環境
5. 情意現象のこと
おわりに

この研究テーマは筆者が昭和56年度から3年間，科学研究費一般研究（A）として助成をうけたもので，辻敬一郎文学部教授，鈴木正弥教養部教授，後藤倬男教養部助教授，広瀬幸雄文学部講師，および，各教授らを中心とするそれぞれの研究グループが分担して研究を推進してきたものである。その成果の全貌は，いずれ研究報告書として発刊の予定である。この小論は，この研究の背景的構想についての要約である。

はじめに

科学としての心理学の歴史は，すでに一世紀を越えた。そして，その間，意識心理学と行動心理学が，とくに発展してきたように思われる。しかし，前者では主として知覚現象の研究が，そして，後者では行動それ自身のみの，したがって，非現実的，抽象的行動の研究がそれぞれ発展した。そこでは日常的な意識現象や生活行動についての統一的理解を困難にしているようである。

諸科学は，その方法論的統一にとどまらず，その対象論的統一（統一的体系化）についても考えるべきであり，そこで，心理学の内部での諸問題についても，他の諸科学での内部的反省と同じ方向の問題として検討すべきであろう。[(1)(2)]

例えば，意識現象と行動との研究についても，心理学的研究として統一的体系化するにあたっては，諸科学の統一的体系化についての論考を他山の石とすべきである。科学が専門化するにつ

れて，科学と科学とが分離していくように見え，一つの科学としての，たとえば心理学の内部でさえ，分離が進行していくように思われる現状にあっては，とくに必要な反省だと考えられる。

本研究はそうした主旨にもとづく，基礎的研究への試みに他ならない。

註

(1) 諸科学の統一傾向への例として，とくに，物理学の進展に関心をもっている。物理学では粒子論と波動論の統一，時空の統一，各種場の統一など，統一への努力がうかがわれる。

(2) 藤井昭彦編　1982　統一理論への歩み　特集　素粒子　別冊サイエンス　日経サイエンス社
本間三郎　1982　クオークまで達した物質の究極　特集「物質の究極は解明できるか」1科学朝日　朝日新聞社
中川昌美　1982　大統一理論が描き出す世界像　同上　特集2

1.　科学の統一の問題をめぐって

近年，科学論で統一の問題への関心は，一そう高まっているようである。それは一方で，科学の成立や実証についての疑惑，各科学の中での学説や理論の乱立，諸科学間における理論の異質性への疑問などが投げられている中で，他方では，科学の学際的研究の名の下に，諸科学の限界領域の研究は，ますます盛んになりつつある実情への疑念に他ならない。純粋科学（基礎科学）と工学や応用科学を，どのように区別しているか，あるいは，区別すべきかも明白にされないままの現状のようである。

しかし，諸科学の統一についての努力は古い。ウィーン学団の方法論的統一を説く論理技術論[(1)]をはじめとして，集合論を用いたシステム論と看做される行動科学[(2)]などもそれであり，ゲシタルト学派の形態論[(3)]も諸科学の統一を目ざした科学理論である。さらに，ブリッジマンの操作主義[(4)]や，ウィーナーの制御論[(5)]なども，科学の統一に資する考え方に他ならない。

ところで，諸科学の統一はどのようにしてなされるものなのか。諸科学はそれぞれ個有の現実，すなわち，個別的現実を論理的に操作して，理論を構成し，それによって理論体系を構築するものである。したがって，諸科学の理論体系を包摂するような理論体系を作ることが，諸科学の統一を果すことになるであろう。

しかし，その場合，その理論体系は全体的現実についてのものであるが，それの構築の過程は，諸科学の個別的現実からの理論構成と同じでなければならぬことはいうまでもない。すなわち，全体的現実についての理論体系をつくる具体的手法は，基礎科学も，応用科学も，まず，それぞれに理論体系をつくり，それらから包摂的な統一的理論をつくるべきであろう。

さて，科学とは経験科学であり，実証科学である。論理学（数学[(6)]）すら，論理の原初は経験的事実そのものの中にある。科学的研究は経験的事実の実証的研究に他ならず，したがって，現実から論理的操作をへて真実に至り，さらに現実にもどっていく過程を辿るものである。すなわ

ち，科学は現実についての論理的回路過程であり，科学の発展は科学的研究の螺旋回路的発展である。[7]

また，現象的事実には，受動的事実と能動的事実とがあり，受動的事実を処理して能動化すること，そして，能動的事実に対処してそれを受動化することが科学的研究である。受動的事実の中，前者は，いわゆる「所与の事実」であり，後者は「所産の事実」である。

もともと，科学とは学の分科であり，現実全体の中に存在する分科的，ないしは，個別的現実の学である。しかし，分科的現実とはいっても，それは全体的現実の中にあるもので，孤立的な現実ではない。同様に個別的現実といっても，他者との共存者であり，相関している。相異していても相似しているものである。このような科学，あるいは，科学的研究についての考え方は，諸科学の統一にとって示唆的と思われる。

筆者ら[8]は，論理的実証主義と呼ばれるウィーン学団の構想に倣って，諸科学は方法論上，原理的に統一であると考えてきた。実証主義は経験主義であり，内在論的立場にたつものであるから，論理の胚胎も現実にあるべきである。したがって，諸科学の出発対象が統一であることと，方法が統一であることは，相通じることと考えられる。ウィーン学団では，その統一的方法として，形式論理ではなく，論理技術論を説き，記号論理を主張しているのである。

註

(1) Wiener Kreis は1920年代後半のウィーンに，Schlick, M. らを中心に生まれた。
碧海純一他編　1964　科学時代の哲学 I　培風館
Hilbert, D. und Ackermann, W.; 伊藤誠訳　1967　記号論理学の基礎　大阪教育図書
Wittgenstein, L.; 藤本・坂井訳　1975　論理哲学論考　法政大学出版局
黒田亘編　1978　ウィトゲンシュタイン　世界の思想家　23　平凡社

(2) Miller, J. G. 1955 Toward a General Theory for the Behavioral Sciences. The American Psychologist, p. p. 513～531.

(3) Köhler, W. 1920 Die physischen Gestalten in Ruhe und in stationären Zustand; 吉岡修一郎訳　1940　ゲシタルトの根本原理　ケーレル「物理的ゲシタルト」の解説　内田老鶴圃

(4) Bridgman, P. W. 1927 The logic of modern physics. 1960 New York, Macmillan, (Macmillan paper books, No. 3)

(5) Wiener, N. 1948 Cybernetics; or, Control and communication in the animal and the machine. New York, J. Wiley & Sons, Inc.

(6) Peano, G. (1858～1932) の数学の根底には論理があるとの考え方から，Symbolic Logic が発展したのは衆知である。

(7) 近年，科学論についての関心が高まっている。
広松渉他　1983　科学論　近代的学知と生活世界　思想 712　岩波書店
Kuhn, Th. S. 1970 The structure of scientific revolution. The Univ. of Chicago; 中山茂訳 1971　科学革命の構造　みすず書房

(8) 後述のように，筆者らは共形態性に関する一連の実験的研究を行なってきた。共形態性とは，ものごとが統一的形態をもつとき，ものごとの存在性を指すものである。

2. 心理学の課題について

科学は現実を出発対象とし，真実を目標対象とする。[1] 現実とは現象的事実であり，真実とは真理的事実である。前者は所与の事実，あるいは経験的事実であるといってもよく，後者は理性的，あるいは，論理的に構成された事実であるといってもよい。

心理学の出発対象は現実の全般であり，その目標対象は「心」についての真実である。そして，現実全般を神経中枢の機能過程に対応するものとして，神経系の機能過程を掌る機能統体を「心」の真実であるとするのである。[2]

ところで，神経中枢の機能過程は，それを中心に考えれば，受動的末梢神経過程から，能動的末梢神経過程への過程に他ならない。すなわち，前者が「心」の機能によって，整理され，形態化され，その受動性が能動性へ転化して，後者に連続すると考えられる。いわゆる新行動主義の心理学[3]も，このような身体内部での神経中枢の機能過程が，外部的刺激を外部的行動へ媒介すると考えるのであろう。しかし，筆者らは，内部的なものが，外部的なものを媒介連結すると考えるに先立ち，概念と記号についての反省の必要を感じている。

概念は中枢機能過程のもつ形態[4]（あるいは形態としての性質）に当たるものと考えられる。したがって，概念は中枢機能の能動的整理性としての論理性をもつと思わねばならない。すなわち，論理は概念の機能過程であり，現実から真実への思考過程である。

ところで，概念は人の内にあり，記号は人の外にある。論理的機能をもつ概念は，人の内部において，これに該当する概念記号に転化する。そして，概念記号は発語，書記などにより，行動的に外化されるのである。その外化された概念記号を，一般に記号と呼ぶ。そこで，外部的な記号に該当する内部的な概念記号を，ここで準記号[5]と名づけることにする。

もし，人びと各自を主体といい，主体の外にあるもの，すなわち主体にとっての他者を客体というならば，準記号は主体的であり，記号は客体的である。そして，準記号は主体的なものとして意味をもっている。ここで準記号が意味をもつとは，それが概念を指示することに他ならない。

これに対し，記号は客体的なものとして，このような意味をもたない。しかし，記号は人と人との間の通信媒体として役立っている。それは外化された記号に該当する準記号が，送信者と受信者の両者にとって，共通であり，それが指示する概念に共同性があるからであろう。そして，この共同性を公共性と呼んでいるのである。

神経中枢過程の形態に，受動的なものと能動的なものを差別できるとすれば，同様に，概念についても差別が可能であろう。ただし，この差別は絶対的なものではなく，相対的なものと理解すべきであろう。そして，受動的概念は現実に直接的に対応し，能動的概念は真実に間接的に対応する。間接的対応とは，概念のもつ能動的整理性による論理，あるいは，行動[6]を介しての対応のことである。

もし，何かへ働きかけ，それを変化させることを操作というならば，論理は受動的概念に働きかけ，行動は現実に働きかけるものであるから，ともに操作である。そして，真実への間接的対応も，それへの操作的対応に他ならない。上述のように，準記号の意味は概念を指示することであるとしたが，その概念は現実，真実に対応するものであるから，準記号は概念を通じて，現実，真実をも指示するものでなければならない。ここで，現実を指示する準記号を指標，真実を指示する準記号を標識と名づけることにする。(7)

標識が真実を指示するのは，既に述べたように間接的であり，操作を介してのそれである。このような反省が正しいとすれば，いわゆる記号論は準記号論であり，記号論理学も準記号論理学，とくに標識論理学でなければならないであろう。ウィーン学団では記号論理学を論理技術学というが，それも論理が上述したように指示過程であり，操作過程であるからであろう。

記号論として，モリスは意味論，構文論の他に語用論を重視するが，(8) それは実用主義を母胎とする行動主義から，記号論理学へ接近しようとするものと思われる。しかし，記号論が準記号論であり，準記号が指示する概念が公共性をもち，しかも，機能的，操作的，行動的であるとすれば，語用論は意味論，構文論に含まれているべきであって，とくに，それらから区別して取りあげるほどのものではないようにさえ思われる。

なお，しばしば，機能的過程ということばを用いてきた。そして，標識は真実を指示する準記号であるとした。一般に，目標を指示する方向をもつことを標識的というならば，機能過程は標識的過程である。機能過程はこの標識性の顕現（顕在）過程であり，機能とはその潜在的可能に他ならない。(9) 機能過程はその事前潜在的可能から，事後潜在的可能への過程でもある。連続的機能過程においては，順次，事後潜在的可能が，また事前潜在的可能となり，こうして潜在的可能，すなわち機能も連続するものである。

また，中枢機能過程のもつ形態について上述したが，その形態は成態である。形態は成立の態（さま）であり，成態は生成の態である。すなわち，形態は成りて在るものの態であり，成態は生じ成り行くことの態である。したがって，目標は標識において，機能は機能過程において理解すべきと同様に，成立は生成において理解されるべきであろう。

一般に，成立を非時間的に，生成を時間的に考えることが多く，そして，成立についてだけ論理を考える傾向が多い。しかし，成立や生成についての上述の考え方や，論理が操作であるとする考え方からすれば，論理は成立，生成にとって統一であると理解されるであろう。

さらに，生成は発生とも同意であろう。とすれば，系統発生，個体発生というにならって，形態の成立を形態発生ということも可能である。系統発生と個体発生についての真実の原理が統一であれば，形態発生の原理も，またそれらと統一であると考えられるであろう。

註

(1) Würzburg 学派の Külpe, O. (1862—1915) は，心理学の対象を Ausgangs=gegenstand と End=

gegenstand に分けた。その考え方に倣った。

(2) 「心」という日常語がもつ非科学性，神秘性をさけるため，宇都宮グループは一連の研究において，「心」を「深層」と仮称した。「深」は必ずしも空間的深さを意味せず，「層」も空間的重なりを意味しない。「深層」とは，現実化，あるいは，多様な実現可能の集合を意味する。したがって，深層の生成，構造，変転，活動を解明することが心理学の課題である。

江見佳俊 1976 深層の力学的研究—文学部心理学科発足以前の愛知学院大学における心理学研究— 愛知学院大学文学部紀要 6 。

(3) Tolman, E. C. 1932 Purposive behavior in animals and men. Berkley, Univ. of California Press, 1951.

Hull, C. L. 1943 Principles of Behavior, An introduction to behavior theory. Appleon-century-Crofts, inc.

1952 A behavior system, an introduction to behavior theory concerning the individual organism. Yale Univ. Press.

(4) Wertheimer, M. Koffka, K. Köhler, W. など，いわゆる Gestalt 心理学者のいう形態 (Gestalt) である。

(5) 準記号は内語または内言 (inner speech) に当たると思われる。いずれにしても，準記号は記号に対応，または，相互対応するものである。

(6) 行動についても，受動的なものと，能動的なものとに区別することができる。たとえば，反射行動，衝動行動，意志行動などを思いおこせばよい。

(7) 言語は人に語り聞かせる，書き読ませる，すなわち，通信するという意味をもち，記号はこれと並んで，操作的に推論する（論理的展開）という意味をもっている。ここにいう「意味をもつ」とは，現実が意味をもっているという場合の意味とは同一ではない。

筆者らは，言語，記号が現実や真実を指示するといい，前者，すなわち現実を指示する記号を指標，後者，すなわち真実を指示する記号を標識と名づけた。

(8) Carnap, R. 1948 Introduction to semantics. Cambridge Mass., Harverd Univ. Press.

1951 The logical syntax of language. London, Routledge & Kegan Paul.

Morris, C. 1946 Signs, language and behavior. New York, Prentice-Hall.

(9) 物理学における動力学 (Dynamics) と静力学 (Statics) を参考にしている。

3. 統一と対応の問題

学は「学ぶ」であり，「まねぶ」である。現実の模倣，すなわち，現実を言語的，記号的に表現することである。そして，表現は私的事実を個人間通信として公表すること，すなわち，私的事実の公共化（社会化）である。また，科学は現実から論理的操作によって，真実に至るものであるとした。

このように考えれば，現実とその記述，私的事実と公共的事実，現実と真実とは，それぞれ相対応するものである。そして，論理的操作を現実から真実への媒介，すなわち，間接操作であると考えれば，現実と真実との対応は媒介的対応，すなわち，間接的対応である。それに対して，現実とその記述との対応は，無媒介的対応，すなわち，直接的対応である。例えば，ケーラーの

意識現象と脳生理過程との対応[1]は直接的対応であるのに対し，共形態における対応は，「かかわり」を媒介としての間接的対応である。[2]

さて，現実としての「ものごと」と場との対応についても次のように考えられるであろう。すなわち，もの（物，人，者）こと（動き）は，存在者，存立者として，どこかに位置している。位置しているということは，一次元的，あるいは，多次元的場に存在していることである。そして，存在者も同様に，一次元的，あるいは，多次元的存在者である。しかし，存在者の次元数と場の次元数とは，必ずしも等しくはない。したがって，存在ということは，存在者と場との次元数変換の媒介である。

また，存在者も場もベクトル集合である。すなわち，存在者と場はベクトル集合としての対応である。その媒介，すなわち，存在はベクトルのベクトル集合，あるいは，高次のベクトルであろう。そして，ベクトルについて，力，エネルギーを仮定すれば，ここに存在者，存在，場を力学的に統一することが可能であろう。対応が統一されていくことになるのである。

なお，「もの」の場における位置の変転である「こと」も，その運動は「もの」と運動との連続的な力学的過程であると考えれば，結局，「もの」も存在も場も運動も，力学的過程として，統一的にとらえられることになるであろう。

さて，現実についての連続の問題は，多次元的連続について考えねばならないが，その基礎として直線的過程の連続について，単純化して考えてみることにする。その例として，神経興奮の直線的連続過程をあげることができよう。この場合，細胞体（樹状突起）から軸索，そして，終末へと伝わる通常の興奮について考えれば，神経繊維内でのその興奮の伝導は直接的連続である。それに対して，神経繊維間の興奮の伝達は，間接的，ないしは，媒介的連続の例である。しかも，興奮の伝導，伝達は一方向的連続過程なのである。[3]

ところで，神経興奮を場との関係で考えれば，神経繊維も存在者として，身体を場として存在しているように，神経興奮も，その周囲と相互作用をいとなむ生理的過程である。すなわち，存在者と場との対応として，興奮とその周囲の生理過程との対応を考えることができるであろう。

前述のように，機能とは有機体の活動であり，中枢における機能は部分活動の統合活動であり，目標活動に他ならない。部分活動は目標への役割分担活動であり，これらも直接的，間接的連続による統一活動である。ここにいう目標活動とは，有機体の機能（活動）であり，常識的には具体的行動を意味する。なお，過程とは経路をもつ運動（活動）のことであり，そこでは非常に高次のベクトル集合を考えねばならないであろう。

以上のように，連続的機能過程は機能と機能の連続する過程であり，受動的事実と能動的事実の連続がその例として考えられ，回路としての一方向的連続もその例であろう。

もっとも，受動過程と能動過程の連続については，受動過程に準能動性を，能動過程に準受動的性格を考えるのが妥当であろう。そして，そのような連続の過程は場の力によってなしとげら

れていくものであろう。

また，媒介的連続については，集合の近傍と，他の集合の近傍とのまじわり，すなわち，媒介集合を考えねばならない。その場合には神経繊維の興奮が，他の繊維に伝わる場合のように，間（ま）の場のベクトルが変化することをも想定すべきである。

註

(1) Köhler, W. 1940 Dynamics in psychology, Liveright.

(2) Hull, C. L. の goal gradient theory の表現をかりれば，箱は goal と主体との間の gradient によって，対物，あるいは，道具としてあらわれる。この gradient が「かかわり」である。

なお，対応，統一は相異，相似の原初であると考えたい。すなわち，相異，相似も対応，統一から発展したものに他ならない。

(3) 興奮の conduction や transmission について，近年の生理学的知見によれば，神経繊維の側枝にもとづく複雑な回帰性結合や，樹状突起同志のギャップ結合による電気的伝達が知られている。

Eccles, J. C. 1957 The physiology of nerve cells. The Johns Hopkins Press.

Pappas, G. D. & Waxman, S. G. 1972 Structure and function of synapses. Raven Press, New York, p.p. 1～43.

4. 人と環境

人は環境の内で生活する。環境的ものごとに働きかけられ，働きかけて生活している。その働きによって，人と環境とは連続すると考えられ，したがって，人の生活は，環境—人—環境の機能的連続過程であると考えるべきである。しかも，この過程は実証的科学の研究過程と同様に，制御過程を含む機能的な連続的回路過程であり，不可逆的過程であろう。

一般に，人という場合には身体を指し，その内に心があると考えるので，人の身体も心の環境と考えてよいであろう。そこで，身体の外にある環境を外部環境，身体の内，すなわち，心がその内にある環境を内部環境と名づければ，上述の環境と人との機能的連続過程というのは，外部環境と内部環境とのそれである。

外部環境は，ものごとも人も，それらの背景もあらわであり，顕在している。しかし，内部環境はものごとの内部と同様に，潜在し，あらわではない。したがって，内部環境は操作によって顕在化し，その内臓や生理活動があらわにされていくのである。

外部環境と，そこでの人の生活とが機能的回路として連続過程であるのと同様に，内部環境と各種臓器の機能とも，回路過程として連続している。外部環境での人の生活を外部生活と呼ぶのに対し，これを内部生活と呼ぶことにする。いうまでもなく，内部生活は間接，または，直接に回路的に外部環境とも連続している。そして，内部環境での諸機能は，それぞれ回路として系をなし，それらの諸系は内部環境において集合し，それぞれを部分系とする統合系をなしていると思われる。

さて，心理学は心を深き機能層をなすものとして研究すべきであり[1]，内部環境での内部，および，内外部の統合系の統合中枢に「心」が存在すると考えるのである[2]。そして，身体は解剖学的には，各種の臓器と連絡路から成りたち，それぞれ生理過程を内有し，各種の有機的組織系をなしている。もちろん，生理過程は機能過程であり，その部分系として神経系がある。神経系も外部環境，あるいは，外部環境的事象と連続し，内部環境，あるいは，内部環境的諸臓器と連続し，それぞれ外部環境的，および，内部環境的回路系をなしている。そして，神経中枢には，両回路系における諸機能の統合，調整，制御の諸機能があるのである。

一般に，心が人の内にあるといわれるが，それは外部環境の内にある内部環境の，そのまた内にある神経中枢にあるということであろう。そして，心は外部，内部の両環境に働きかけられ，働きかけて機能するものである。先にもふれたように，働きかけられて生ずる機能を受動的，働きかけることで生ずる機能を能動的と名づけるならば，この機能的回路は受動的機能と能動的機能の回路であり，機能過程は受動的・能動的，および，能動的・受動的機能の連続的過程に他ならない[3]。

この連続的機能過程は，環境の影響をうけるものであるが，内外両環境の過程の連続は比較的に簡単であろうのに対し，神経中枢での受動的機能も，能動的機能も，また，その連続機能も簡単ではない。とくに，媒介過程としての連続は，さらに複雑である。この連続を「処理機能」と名づけることにする。なお，ここでいう簡単な過程とは，機能過程をベクトルであらわすとすれば，少次元における低次のものであるという意である。

さて，内外両環境での機能過程が，環境の影響をうけるように，神経中枢での機能過程も同様と考えられるので，その意味で神経中枢をも，環境であるといいうるであろう。そこで，これを中枢環境[4]と名づけることにする。いうまでもなく，中枢での機能過程は，外部，内部，中枢の三つの環境の影響をうけるということである。

ところで，環境が影響するとは，それが機能することであるから，環境は「機能力」をもったものと考えざるをえない。そこで，環境を「場[5]」ということができるのである。そして，場は，そこで生ずる機能過程に対して，潜在的機能[6]をもつと考えられる。また，中枢場についていえば，外内両環境から導入される機能的過程によって，場の静的機能が動的化され，前者と後者によって，形態が成りたち，その形態によって，さらに，場が動的機能化して，形態が機能過程として連続して行くのであろう。中枢場での機能的連続過程は，高次多次元の複雑な過程であるのは間違いなく，したがって，中枢場も重層多層をなすであろう。このような中枢場の機能的，あるいは，力学的構造の解明を志向することこそ心理学の課題に他ならない。

註

(1) 前掲2の註(2)を参照。

(2) 顕在機能過程に対する潜在機能（可能）を考え，後者は前者の潜在的統合機能であるとするのである。

(3) この小論の主題である「知覚系と行動系の統一的理解」というときの，両系の統一とは，このような連続的過程を意味する。

(4) 中枢環境というとき，環境の「環」という表現に違和感があるとすれば，単に中枢境とよんでもよい。

(5) Köhler, W. は心理学に Field theory を導入したが，彼の脳髄における場 (Field) もこの意味でのものと思われる。

Köhler, W. 1940 前掲3の註(1)

1969 The Task of Gestalt Psychology, Princeton Univ, Press.

(6) 機能的過程を動力学的なものとすれば，潜在的機能とは静力学的なものである。

5. 情意現象のこと

現実的環境にせよ，現実的生活にせよ，すべて現実的なものは，おおむね，感情的であるといえよう。したがって，心理学が現実を出発対象とするかぎり，感情の研究は重要である。おそらく，心理学者は誰しも，感情の心理学的解明の必要を感じてきたであろう。前述のように，諸科学の方法論的統一にとどまらず，対象論的統一（統一的体系化）について考える場合には，情意現象についての検討は一そうその重要性をますことになる。古くギリシャ時代から，意識を作用と考え，それを知・情・意に区別し，その作用源を総括する非物質的な実体としての精神を仮想していた。こうした態度が，現代にいたるも，まったくは払拭されていないために，情意現象の研究を貧困にしていたのであろうか。いずれにもせよ，感情の研究にあたっても，経験科学としての研究態度に徹すべきは当然である。

かつて，ステュンプ[(1)]が，感情を一種の感情感覚として，ヴント[(2)]のように，先験的に感情を感覚と区別しなかったことは興味深い。彼は，感覚が客体の性質であるのに対し，感情は主体の性質であるとし，それら客体も主体も，ともに，先験的区別をすてされば，意識野に像として分立する「もの」であるとした。例えば，花の紅いことも，自分が快いことも，その時どきの「もの」の性質にすぎないというのである。

筆者らはゲシタルト理論を発展させるべきであると考えているが，しかし，情意の研究に従事したレヴィン[(3)]すら，結局は，飛躍して，トポロジー心理学，ホドロジー心理学，集団力学を提唱するにとどまったことに，疑問をいだかざるをえない。彼の現実についての記述的構成と，それらからの真理的構成とが不連続だと感ぜざるをえないからである。

そもそも，心理学の対象としての意識は，現象であり，直接経験的事実，すなわち，直接的事実である。そして，知覚，感情，意志は直接的事実として統一であり，それらにみられる差別は，直接的事実の「あり方」や「現れ方」としての性質に関するものに他ならない。知覚はその意味での性質として客体的であり，感情は主体的であり，意志は行動的なのである。意識心理学は，この即事的性質に沿って，客体的であること，主体的であること，行動的であることに従って構成された客体，主体，行動から，操作的に意識現象を解明しようとするものである。

さて，筆者らは環境を，外部環境，内部環境，および，中枢環境に区別した。そして，知覚現象の現実的場は，主として，外部環境であり，感情のそれは，主として，内部環境であろう。それぞれ「主として」と述べたのは，知覚現象でも内部環境を現実的場とするものもあり，内外の境界を現実的場とするものもあるからである。その境界も現実的には，内部環境に所属する上に，その外的近傍すら内部環境であることもありうるからである。

知覚現象には上級と呼び得るものから，下級と呼び得るものまで，種々の様相がある。上級な知覚現象は，その内容の有様が分化しており，分節しており，形態，すなわち，形をもち，外部環境に定位している。それに対し，下級な知覚現象は上級知覚の形態のように，その位置は定かでなく，その性状は上級知覚現象の背景の性状と類似し，状態的であり，それ自身の背景も不分明である。そして，行動的でもある。そのため，それを言語として表現する場合には，上級知覚の形態の属性として述べられる場合が多い。しばしば，下級知覚は感覚といわれる場合が多いのは，知覚現象が形態的であるのに対し，感覚現象は状態的であるためであろうか。

さきに，感情現象の現実的場は，主として内部環境であると述べたが，その現象的様相は下級知覚現象と似ている。そのため，現象としては，下級知覚現象と区別しえないものも多い。外部的な上級知覚現象といえども，その出現が突発的で，強烈な場合には，爆発的激情と似た現れ方をするように思われる。瞬間的に，同時に行動が起爆することも似ている。ただ，相違するのは，知覚現象が感情的性質をもつのに対し，感情現象は非感性的である点であろう。しかし，いずれにしても，両者を氷炭相容れない乖離した現象であると見なすことはできにくいということである。

また，感情は状態的であるとも述べた。知覚現象にも多いが，感情はほとんど四次元的方向をもっている。情動[(4)]という言葉が指示するように，動的方向をもつ感情は，知覚現象に定着してはいないが，その属性として，知覚現象からの方向をもつ。とくに，自身，自我からの方向をもつことが多い。欲情，願望などというが，それらは目標への方向をもつのである。このように，情動は行動への方向でありながら，行動自身の目標への方向を，行動の脈絡として支えるものであるように思われる。

いずれにせよ，上述のように，知覚と感情は融合した意識現象であり，その現実についての詳細な記述こそが，理論的構成にあたっての重要な素材なのである。

註

(1) Stümpf, C. (1848～1936) によれば，快・不快の情調は感覚とは全く異った種類の心的要素ではなく，感情感覚 (Gefühlsempfindungen) という一種の感覚であるとした。
Stümpf, C. 1906 Über Gefühlsempfindung. Zeitschrif. f. Psychol., (伊藤吉之助編 1930 哲学小辞典 岩波書店より)

(2) Wundt, W. 1896 Grundriss der Psychologie, (1922 15, A) Alfred Kröner Verlag, Leipzig.

(3) Lewin, K. 1935 A dynamic theory of personality; selected papers. (Tr. by Adams, D. K.

& Zener, K. E. …) McGraw-Hill Book Company, Inc. New York, London.

1936 Principles of topogical psychology. (Tr. by Heider, F. & Heider, G. M.) McGraw-Hill B. C., Inc. New York.

1938 The conceptual representation and the measurement of psychological forces, Duke Uni. press., (1968 Johnson Reprint Copo. New York)

(4) 感情を Sentiment, affection, emotion と現れ方によって区別することができる。情動 (emotion) とは行動との連続を配慮した表現である。

浜治世は感情についての用語はいろいろであり，それは必ずしも，翻訳の問題ではなく，原語そのものに関して研究者の立場によって受けとり方のニュアンスが異ってくるのであると指摘している。

なお，松山義則，浜治世らによる感情研究への強い関心と，その成果には学ぶべきところが多い。

松山義則・浜治世 1974 感情心理学[1] 理論と臨床 誠信書房

浜 治世 1981 序論 感情と人格の実験心理学的アプローチ 浜治世編 現代基礎心理学8 東大出版会

おわりに

以上で，ここでの論述を終るが，簡略に過ぎて，読みづらくしている点も少くないと憂慮している。筆者らは，心理学における従来の諸研究が無意味であったなどとは，少しも考えていない。ただ，従来の研究成果を異った視点から論考しなおす必要もあることと，筆者らの今後の研究の方向を示唆しようと試みたにすぎない。(1)

筆者や研究分担者，および，そのグループが，それぞれに進めてきた諸研究は，こうした方向を指向するものであったこと，また，今後とも，このような構想を背景にして，実り多い研究を進めるべきであると自覚しているということである。なお，この小論で論述した背景的構想そのものについても，今後，さらに，考えを深めて行く必要があることはいうまでもない。

註

(1) この小論は，筆者が宇都宮グループに属し，日本心理学会42回大会 (1978) から47回大会 (1983) にわたって，共形態に関する一連の研究の背景的構想として，口答発表してきたものの一部である。共形態に関する研究には，宇都宮仙太郎先生を中心にして，筆者の他，佐野守，河村寿人，江見佳俊，早川昌範の諸教授らが参加した。

内山・宇都宮・佐野	1978	共形態性に関する研究 I	——その背景的構想——
	1979	仝 上 IV	——深層の機能について——
	1980	仝 上 VII	——深層の研究における感情への関心——
	1981	仝 上 IX	——深層の研究における感情への関心(その2)—
	1982	仝 上 XI	——心理学における機能的連続の問題——
内山・宇都宮・佐野・早川	1983	仝 上 XIII	——現実全般の性質について——

なお，筆者は宇都宮仙太郎先生（元名高商，元愛知学院大教授）に師事し，30年余にわたり，心理学の諸問題について広く教授をうけ，懇切なご指導をえた。先生は傘寿を迎えられて二年有余，今，なお，矍鑠として明晰。ここに心からなる謝意を表するものである。